

紹介した美術及歴史的記念建造物保存に關する國際專門家會議もその一例である。然るに本會議は、議長 Ugo Objeiti 氏が開會宣言のうちに述ぶる所に從へば、美術の傾向、主義等を論ずるにあらずして、専ら現代美術に關する實際的問題を取扱ふを主眼としてゐる。これは、本會議の特色であると同時に、又こゝにその意義が存すると信するが故に、以下この紹介を試みようと思ふのである。

本會議は、歐洲九ヶ國の美術家、批評家、美術館博物館首腦者、並びに國際聯盟の學藝協力國際學院の代表者等が出席した。論議せられた問題は、大要三つに要約される。即ち、一、美術家の著作權の擴充、二、美術製作競技、特に建築に於ける製作者の權利の伸長、三、美術家の爲の金融機關の設立、等であるが、なほ他に美術に關する教育、技法、出版、偽作に對する處分或は美術と工業との關係に就いての論議が行はれた。

本會議の趣旨とする所は、美術品の生産を以て社會繁榮の一要素たりとし、これによりて相隣れる國民同志の親善が増し、具體的には交換經濟を助長するものであるとの見解より、ひいては他の一般問題の解決の方法、並びに之を適用する途を見出す上にも役立つとなすのであつて、この立場より各國美術の製作の實際の方面に有益なる勸告をなし、その實行にまで導いて、美術の健全なる發達に資せんとするを目的としてゐる。従つてその實行に當つては、各國代表者の熱心なる努力に期待し之を希望してゐるのである。

なほ附言すべきは、ヴェニス隔年展覽會の事務局が、この國際會議の永久的公共事務機關となつて、將來の會議の開催準備に當るといふのであるが、これは、國際聯盟がジュネーヴを活動の本據となす如く、ヴェニスを以て、現代美術の諸問題研究の爲の國際美術聯盟の中心地となさんとする意圖になり、こゝにイタリアの文化政策の一端が窺はれるが、事業は大いに慶賀すべく、又その健全なる發達と活動とは期待さるべきものである。

翻つて、美術の社會性、國際性を考ふことを怠り勝ちなる我國の美術界としては、不幸にして今回は出席の機會を失したが、將來開かるべき此會議に参加する必要の多分に存するは勿論であり、本會議の重點が、美術の社會的經濟

的問題の考慮に置かれてある點よりして、我國の美術家もなほ全世界の美術家と利害を共通してゐる限りに於て、特にその必要があるのではないかと考へられる。
(木下)

エルミタージュ美術館の所藏品賣却

革命後のロシアの博物館設備は頗る増大し、一九二三年 Senkin, Morozov 兩蒐集を併せて設立されたモスコの西歐近代美術館 (Gos. Muzej Novogo Zapadnogo Iskustva) の印象派以後の比類なき蒐集を始め、博物館、美術館の新設されるもの多く、各國の注視の的となつたのであつた。

然しその中樞をなすものはレーニングラードのエルミタージュ美術館であり、その基礎も古く、優れた古美術品の蒐集は依然として學徒にとつて一聖地たるの觀があつた。

然るに昨年十一月米國財務長官メロン氏が同館所藏のヴァン・エイク、ボデイチエリ、ヴェラスケス、ルーベンス、ヴァン・ダイクの一粒選りの名畫を百六十萬磅の巨資を投じて購入し、斯界に一大衝動を與へたのであつた。一度この報道が傳るや學界の非難は翕然として起つたのであるが、近著の Kunst und Künstler 誌にも Emile Waldmann 氏がこの問題を論じてゐる。その記事に依れば同館の所藏品賣却はこれのみに止らず、現在に於ては十分なる金さへ投ずれば同館所藏品は何なりとも思ひの儘に購入することが出來ると云ふ。レンブラントの晩年の作 "Der verlorene Sohn" の如きもその價が四百萬弗の巨額である爲に纔に同館に止まるに過ず、二流作品や金銀器の賣却は別としても、Antonio Mor の肖像畫二點は四十萬マルクでアムステルダムの國立美術館に移され、又エルミタージュ自慢の四十點のレンブラントの作品は、内十點以上が既に失はれてゐることである。

こゝに學界の非難に對してレーニングラード大學の美術史教授 Theodore Schmit 氏がバリー發刊の Musée 誌上に公にした次の意見は、ロシアに於けるこの問題に關する意見をうかゞふ上に興味あるものであらう。

「階級闘争に於ては藝術家は意識しなくても、その階級の代辯者たるに過ぎない。藝術的價値は階級の意識、目的、愛憎の現れであり、社會的な相對的なものである。故に絶對的な名作なるものは存在しない。然も藝術は單に社會狀態の現れたるのみならず常に或世界觀のプロパガンダを演ずる。それ故に我々は資本主義的ブルジョア社會の崩壊せる偶像に跪く必要はなく、又博物館を古代名家の作品で満して置くのは愚であらう。」

(杉田)

ヴァン・ゴッゲ作品偽作事件

近著の *Kunst und Künstler* 誌は所謂「Wacker 事件」の顛末に關し諸氏の報道を載せてゐる。同事件は Otto Wacker なる者に關するヴァン・ゴッゲの繪畫の偽作事件であるが、嘗ては Meier-Graefe, de la Faille 等の優れた鑑識家もこれを眞筆と認めた程精巧なものであり、その規模も大きく、關係するところも廣く、然も偽作と認むべき物的證據を缺いたのでその審理も各専門家を聘して慎重に行はれたのであつたが、遂に去る四月右 Wacker は有罪と認められ一ヶ年の懲役に處する旨の判決が下り、こゝに同事件は一段落をつげたのであつた。併しこの問題は各専門家にとつて一つの試金石として、又各種の見解の確實の度を現實に示すものとして注視されたものであり、且事件そのものも興味あるものであるから、こゝに右諸氏の報道に據つて事件の外廓を概略紹介することとする。

Otto Wacker はデュッセルドルフの一畫家の息であり、Olindo Isenhardt なる藝名を持つ舞踊家であつた。彼がベルリンの畫商と交渉を持つたのは一九二二年頃と云ふが、當時持參したオランダ、及びデュッセルドルフ派の作品は、Meier-Graefe, Rosenhagen 等の鑑定あるにかゝはらず疑はしいものとされた。然るに一九二五年末から二六年にかけて彼は夥しいヴァン・ゴッゲの作品を携へて再びベルリンに現れ、これを畫商間に持廻つたが、それ等の作品はオランダの専門家 de la Faille 氏の確認するところであり、氏の *Catalogue raisonné* に收載せられ、又 Meier-Graefe, Rosenhagen 等の鑑定も之に一層の重みを加

へたので賣買は圓滑に行はれたのであつた。一九二七年一月ベルリン、ヴィクトリア街で de la Faille 氏の後援により二つのヴァン・ゴッゲ展覽會が開かれた。一は畫商 Paul Cassirer の店で開かれた繪畫展覽會であり、一はこれより前 Wacker のサロンで開かれた素描の展覽會であるが、共に一般の好評を博したのであつた。然るに Cassirer 展覽會の間に到着した Wacker の出品畫三點は de la Faille の推薦するものであるが Cassirer にとつて全然未知の繪であり、これを受取つた Cassirer の店員は直覺的に偽作だと信じたのであつた。果して Cassirer の天井採光室に陳列されたこの三點は眞作の中にあつて恰も「錦の上の綿屑」の様に見えたのである。適々この頃 de la Faille のカタログの第一版が上梓されたので、Cassirer はこの不快な發見に驚き異狀な熱心を以てこれを検討したのであつた。驚くべきことに Cassirer が嘗て各所で瞥見したものの中、疑念を挿んだものは全部 Otto Wacker 又は「スキス某氏藏」と記されて居り、而も此等は皆その前所有者が不明で、文獻にも曾つて記載を見ないものであつた。斯くの如き作品が同氏のカタログ中には三十三點も存した。Cassirer は Wacker の所藏品を展覽會から除外する事を正當と感じ Wacker 及 de la Faille に彼の鑑定の結果を報告したが、一方 de la Faille のカタログに疑を持ち、又 Wacker の繪畫を取扱つたベルリンの同業 Thunhauser, Mathiesen, M. Goldschmidt 等も參集して前後策を講じ、取敢ずこの事件をベルリンの警察に提出したのであつた。其頃 Meier-Graefe も米國から歸國し Wacker を援助してフランス印象派の展覽會準備をして居たが、Wacker に關する風聞をきき、漸く彼に對して不信を抱くに至つた。de la Faille, Meier-Graefe 及び警察當局はこゝに於て Wacker の所藏品の前所藏者の追求に全力を挙げたが、幾多の困難の後知り得たことは纔に前所有者はスキス在住の一ロシア人であり Wacker と舞踊會に於て相識り、その所藏品を出所に就いては一切沈黙を守るとの約束で Wacker にのみ譲渡したと云ふことであつた。Wacker は de la Faille, Meier-Graefe を同伴してスキスに赴きそのロシア人に面接させると約束したがこれは履行されなかつた。たゞ Wacker のみが單身で、ゴッゲの繪に關する彼との約束を取消す爲スキスに赴いたが、該ロシア